書評

Reed L. Wadley, ed. *Histories of the Borneo Environment: Economic, Political and Social Dimensions of Change and Continuity*. Leiden: KITLV Press, 2005, vi+315p., bibl., index, fig.

本書は，2000年8月にオランダ・ライデンで開催された国際セミナー「ボルネオの先住民および植民地の歴史の中での環境変化 —— 過去からの教訓と将来の展望」の成果である。したがって，執筆者は複数で，歴史学，人類学，地理学などいくつかの異なる専門分野の研究者11名による計11編の論文が本書には収められている。

本書は，R. L. Wadleyによる序章で述べられているように，近年ボルネオ島で進んでいる森林減少・劣化を課題として，過去から今日までにみられた人と自然環境とのかかわりを明らかにしようとする試みである。対象としているおもな「環境」は，ボルネオ島の陸域生態系の中心である森林やそこから採集される林産物である。対象とされている期間，時期は，論文によって異なるが，おおむね11世紀に及んでいる。本書は3部より構成されている。第1部では交易の距離と地元経済についての4編の論文が，第2部では植民地および国家の資源政策についての3編の論文が，第3部では社会変容についての3編の論文が収められている。

各論文の概要を紹介しよう。第1部の1編目の論文は，E. Tagliacozzoによる「沿岸域で，そして森林へ —— 北西ボルネオの生態史における華人交易の派生，900–1900年」である。サラワク，ブルネイ，サバを対象に華人に焦点を当て，南洋との交易が盛んになった10世紀から19世紀までのボルネオ島における林産物採集・交易や森林開発について描いている。とくに，ヨーロッパ人が到来する16世紀以降，ボルネオ島は徐々に世界経済に組み込まれ，林産物の採集や交易熱はボルネオ島内陸部におよぶようになる。華人は，交易ばかりでなく，入植することにより，鉱山やプランテーションの開発にかかわりボルネオ島の景観を変えていく。それが今日みられる大規模で急速な森林景観の変化を引き起こしているひとつの要因になっている。

2編目の論文は，B. Sellatoによる「食のための森，交易のための森 —— 持続性と搾取の間：伝統的人々の経済的実利主義と東カリマンタン北部の交易史」である。近年の自然保護や開発にかかわる言説の中で，しばしば先住民は森林資源を持続的に利用する人々として語られる。この点について著者は，自給のための資源と交易商品としての資源を分けて検討すべきであると主張する。すなわち，自給のための資源は，その所有や利用についての制度が発達しており，持続的に利用されてきた。一方，とくに国際的な交易のための資源は，略奪的に採集されるため非持続的な利用になりやすい。本論文では東カリマンタンを例にとり，17世紀から今日まで交易資源の採集地が沿岸から次第に内陸に移っていく過程，19世紀後半以降の採集にみられた交易のためにおこなわれた略奪的な資源採集を説明している。

3編目は，C. Eghenterによる「保全の歴史か，搾取の歴史か？ インドネシア・ボルネオ島内陸部の事例」である。筆者は，東カリマンタンの最上流部に位置するアポカヤンにおける野生ゴムの一種のグタパーチャと沈香の2つの林産物を事例に，それらがどのように採集されてきたかについて述べている。グタパーチャは1900年代初めに商品価値が高まった野生ゴムである。沈香採集は，1990年代のブーム時に下流の町から大量の外部者が入り，略奪的な採集がおこなわれた。それぞれの採集は，異なるアクターがかかわりおこなわれた。アクターのひとつである地元民ケニャの対応は，どちらの資源に対しても，それら林産物の分布・生育状況，村内の人々の立場や関係，農業や他の林産物採集を含めた生計のたて方との関係に応じて，時期により，村の状況によって異なっていた。森やその周辺に住む先住民は，森を保全する人々か，あるいは破壊者なのか，といった二分法的な考え方ではなく，場所や時期ごとの文脈を十分に考慮したとらえ方の必要性を述べている。

4編目の論文は，L. Potterによる「植民地期のボルネオ島における商品と環境 —— 経済的価値，森林改変および保全への関心，1870–1940年」である。この間にサラワク，サバ，西カリマンタン，南カリ

マンタンでは，森林景観の商品化が急速に進みはじめた。その状況と植民地行政官のかかわりを，グタパーチャ，ジュルトン，タンニンといった林産物の採集や，タバコ，パラゴムといった商品作物の生産を事例にして描写している。ときどきの商品需要に応じて，林産物が大量に採集され，プランテーション開発が進められた。当時からすでに森林の劣化・消失は問題になっており，1900年代初期には，公的な森林行政をつかさどる組織がボルネオのおもな地域におかれた。徐々に森林の評価が科学的に進められるようになる。1920年代には森林の材積量が過大評価されたことがひとつの要因となり，1960年代以降の大規模な商業伐採がおこなわれるようになった。

第2部には，植民地および国家の資源政策について3編の論文が収められている。

1編目の論文は，R. L. Wadleyによる「インドネシア・西カリマンタンにおける境界，領域，資源アクセス，1800–2000年」である。境界とは，自然資源や社会・政治的な資源へのアクセス権を確保するために設定される。西カリマンタンにおいては，従来からみられた村やエスニックグループのローカルな領域に基づく林産物などの資源の利用がみられた。そこに，植民地政府や国家による境界が入ってくることにより，ローカルな領域の資源アクセス権との間に混乱が生じた。その事例として，1960年代以降，商業伐採が盛んになった時期の境界，近年盛んになった違法伐採と境界について述べ，国家のシンプリケーションによる森林管理失敗について考察している。

2編目の論文は，A. A. Doolittleによる「土地をコントロールする —— サバにおける土地所有権と権力闘争，1881–1996年」である。今日のサバにおいて，植民地時代から，その後の近代国家に至るまでの間，森林資源の利用の際に用いられてきた言説を分析している。地元の慣習法よりも西洋法を上位において考えられてきた資源へのアクセス，資源の中央政府による管理，プランテーションによる商品作物栽培の正当化と自給作物栽培の焼畑への批判などの事例をあげている。これらの事例から，植民地時代のイギリス人による考え方と，近代国家のエリートたちのよる考え方の類似性を指摘している。

3編目の論文は，M. R. DoveとC. Carpenterによる「17世紀から20世紀の間のインド・マラヤにおける『毒の木』とその見方の変化」である。インド・マラヤ地域の先住民たちが毒の木（*Antiaris toxicaria*）から採取する毒は，吹き矢に塗られて武器として使われていた。植民地時代の初期のヨーロッパ人にとって，その「毒の木」はあらゆる生き物を短時間で殺傷してしまう脅威であり，恐ろしいものとして，ある意味，幻想的に語られていた。しかし，そのような過大な表現は，その後，探検家や研究者によって見直され，次第に野蛮なもの，遅れたものとして記録されるようになった。それは，領土的な植民地支配が進むのに同調してみられたのである。

第3部は，社会変容について論じた3編の論文が収められている。

1編目の論文は，G. N. Appellによる「マレーシア・サバのルングス人の文化生態システムの破壊 —— 西洋イデオロギーがボルネオ島の環境を破壊に導いた歴史」である。サバ州北部のルングス人が住む地域において，北ボルネオ会社が介入してきた19世紀後半から今日に至るルングス人の文化生態システムが変化していく過程と背景を述べている。北ボルネオ会社，植民地政府さらに近代国家のエリートたちによるプランテーションなどの開発により，ルングス人が創り上げてきた森林をベースとする土地景観が破壊された。キリスト教布教に伴い，それまでのルングス人の価値観や認識体系が破壊された。開発，発展，健康といった言説の下に，もともとルングス人にみられた精神と環境のつながりが破壊されてきた経緯が説明されている。

2編目の論文は，M. Janowskiによる「2つの象徴的経済の間の架け橋としての米 —— サラワク・クラビット高原内あるいは外への移住」である。サラワクの奥地に住むクラビット人は，稲作を中心とした社会を形成している。1960年代から水田化が進み，同時に沿岸の町ミリと空路で結ばれることにより，米が商品として売られるようになる。1980年代以降は，多数のクラビット人がミリへ出稼ぎあるいは移住のため出て行くようになる。町住みのクラビットたちの同郷社会の中では，米は買うものではないと考えられ，故郷より運ばれた米を利用してい

る。町における新たなクラビット社会の形成や村社会の変化など，大きくクラビット社会は変容してきた。このような中で，彼らの象徴的経済の中心として村と町のコミュニティーをつなぐ役割を果たすようになったのが米である。

3編目の論文は，G. Saunders による「終章 ――見物人の目，開発か，搾取か？ ボルネオの環境の変わり行く認識」である。ヨーロッパ人，植民地政府，近代国家，地元の先住民などによる環境への見方は不変ではない。その変化の様子を本書に掲載された論文を適宜引用しながら描いている。その中で，近年のとくに大きな変化は，プランテーション開発による大規模な森林減少である。森林劣化・減少の問題は，深刻化してきているが，希望がないわけではない。たとえば，インドネシアでみられる地方分権化により地元先住民の土地や森林への権利が強まることはひとつの明るい兆しになる可能性を指摘している。

以上述べてきた本書の概要からもわかるように，すべての執筆者が多少の差はあれ，今日のボルネオにおける森林資源の劣化・減少を問題と捉え，さらに何人かはそれに伴う地元の先住民らへの社会・文化的な影響を関心事としている。このため，それらと大きな関連がある，ヨーロッパ（おもにイギリスとオランダ）による植民地支配が大きなトピックのひとつとなっている。個々の論文は，森林資源利用について，各調査地域にみられた共通あるいは固有の歴史的経緯が紹介されており，たいへん興味深かった。

今日の森林劣化・減少の問題を考える上で，ボルネオ島をひとつの単位として環境の歴史を扱うのは面白い試みだろう。そこでは，元来，熱帯雨林が広域に分布し，人々の分布も総じて希薄で，内陸部ではダヤクと総称される人々が森林資源に頼りながら暮らしていた。森林利用の地域差もそれほど大きくなかった。ところが，そこに，ヨーロッパの植民地政府が入り，第二次大戦後，今日の国民国家が成立した。本書の複数の地域の状況を扱っている Potter や Tagliacozzo などの論文から，あるいは個別の論文の比較から，植民地期以降の森林や森林資源の利用のされ方は，植民地政府や国家が設定した境界を境に大きく異なることがわかる。私も現地調査の経験から，ボルネオ島内の森林の状況やそれにかかわる人の動きは一様ではなく，国や州の境界を境に大きく異なるという印象を持っている。

具体的には，本書のいくつかの論文からもわかるように，インドネシア側では，各地で急速に商業伐採とともにオイルパームプランテーションや石炭採掘などの鉱山開発が進んでいる。保護地域はいくつも設定されているが，違法行為などにより必ずしも適切に森林が管理されているとはいえない。一方，サラワクでも，オイルパームプランテーションはここ20年ほどでだいぶ増えてきたが，まだその割合は小さい。森林保護地区が設けられるとそこの保全は比較的うまく進む。それに対してサバはすでにオイルパームやアカシアなどによるプランテーションが広大である，といったような違いである。国や州の境を越えて，なぜ，そういった差が出てくるのであろうか。そのような森林利用や管理に違いが生じてくる背景をより深く検討していくことで，今日，なぜ森林の劣化・減少が進行していくのか，また，どうすればよりよい方向へ向かうのかについてのヒントが得られるのではなかろうか。

本書では，Potter など何人かの執筆者は，複数の研究対象地間の事例についてたいへん興味深い比較をおこなっている。しかし，本書全体を通じて，国家間，州間あるいは地域間の比較，分析が十分になされてはいない。終章において，各論文が扱った場所，時期，森林資源への影響とその要因（市場，政府との関係，林産物の採集システムなど）を総合的にまとめ比較するような試みがあれば，各地の状況や位置づけがより浮き彫りになっただろう。

また，森林資源を扱っているので，その利用状況や持続性が評価されるときには，どうしても生物の面からの評価を知りたくなる。本書に，生態学的な視点が入ればさらに興味深い森林への影響についての議論ができたであろう。

上のような指摘点は，本書のように研究集会の結果として，複数の執筆者による論文を編集した場合は，得てして生じやすい問題点である。序章にもふれられているとおり，環境史には複数の研究分野からの視点が不可欠であり，複数によって執筆されるからこそ歴史の多面性が理解できるのである。熱帯での環境史についての研究はまだ歴史が浅い。本書

のような試みを通して，環境史の分野における研究蓄積が増していけば，今日の環境問題の解決へも大きく貢献するであろう。

（市川昌広・総合地球環境学研究所）

David Henley. *Fertility Food and Fever: Population, Economy and Environment in North and Central Sulawesi, 1600–1930*. Leiden: KITLV Press, 2005, 711p.

This voluminous book, written by one of KILTV's researchers, aims to explain demographic change and related environmental transformation in North and Central Sulawesi, during much of its colonial history. The over 700 pages volume is compelling, because of its argument, and because of its extremely rich detail, as the author seems to have unearthed almost every possible source of information that is available on the region. The main thesis of the book is to refute the positive link between demography, productivity and agricultural technology, the Boserup thesis, and suggest a Malthusian mechanism of productivity largely defining demographics, but highly mediated by social cultural and political factors. The 15 chapters of the book painstakingly analyze the many complicated details of this mechanism. The elements of this mechanism include, in the order as they each are presented in separate chapters of the book, disease and mortality, disease control, reproductive fertility, and the link between population and the environment.

About three quarter of the book focus on the demographic history of North and Central Sulawesi, and this constitutes the better part of the book. Summarized, the mechanism that explains demographic is as follows: Disease and poor health causing death, together with low fertility, kept the pre-modern population in a crisis ridden quasi equilibrium. Why a sustained population growth took off since the second half of the 19 th century is one of the overarching questions of the book. Improvements in healthcare, like small pox vaccination and quinine since the early 19th century, and hygiene were for some time outweighed by new diseases like Cholera, or more prominent spreading of malaria as a result of increased migration and trade, related to economic progress and improved transportation networks. Despite these factors, however, the death rates in North and Central Sulawesi regions started to decline during the second half of the 19th century. Food supply was a key factor influencing demographic change. Even though famine was not common in Sulawesi, variations in food supply account for important changes in death rates on account of infant deaths and overall submission to diseases. Hence food is an indirect but key factor in the demographic picture of the regions.

Since the second half of the 19th century, food security increased, largely because of the integration of the region's economy in wider economic networks which also facilitated food trade. The link between food and demographics becomes only clear, however, if cultural and social factors are considered, including slavery, the role of women and ritual feastings. Markets replaced some of these institutions that appear to have been related with assuring food supply and survival. Fertility also appears to have increased with the onset of incipient modernization because social measures to keep fertility down like delayed marriages, abstinence, abortion, and infanticide were abandoned.

Following the debate on the secrets of North and Central Sulawesi demographic history, the volume veers off into a discussion on vegetation cover change and how the population history related to this. This discussion only takes place in the last three chapters. While the chapters again bring together rich source material on vegetation cover change and related changes in agri-